



再生湿地 (茨城県稲戸井調整池) におけるチュウヒの繁殖記録

池田昇^{1*}・中森弘明²

1. 〒 302-0109 茨城県守谷市本町 4533-4

2. 〒 151-0071 東京都渋谷区本町 3-12-1 株式会社オリエンタルコンサルタンツ

はじめに

チュウヒ *Circus spilonotus* はヨーロッパチュウヒ *Circus aeruginosus* の分布域の東に分布する種で、バイカル湖周辺、モンゴル以東、アムール川流域、中国の内モンゴル中部から東北地方の北・中部、ウスリー地方で繁殖し、東南アジアで越冬する (森岡 1995)。日本では北海道や九州以北の湿地や干拓地、湖沿岸や大きな河川の岸辺などの広いヨシ *Phragmites australis* 原で局地的に繁殖し、国内では 136 つがい (うち茨城県では 1 つがい) の繁殖が確認されているが (日本野鳥の会, 絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖数が明らかに～全 136 つがい、国内最少のタカ科鳥類であることが判明～<<https://www.wbsj.org/activity/press-releases/press-2020-12-10/>>参照 2021 年 12 月 20 日), 多くのものは冬鳥として主に本州以南に渡来する (森岡 1995)。茨城県では 2005, 2006 年に筆者によって利根川下流の河川敷で確実に本種が繁殖していたことが報告されている (池田・田沼 2007)。今回は利根川河口より約 90 キロ上流の守谷市の利根川稲戸井調整池の中で繁殖していること、およびその営巣地が再生された湿性環境であったことを確認できたので、ここに報告する。

発見の経緯

稲戸井調整池は国土交通省 関東整備局 利根川上流河川事務所が行っている利根川・鬼怒川・小貝川の洪水調整施設で、茨城県取手市と守谷市にまたがる利根川 (左岸 84 km ～ 95 km) に位置している。2009 年に越流堤が完成した後、調整池容量を確保することを目的として掘削工事が行われてきたが、周辺は動植物の豊かな生態系が存在していることから環境モニタリング調査 (猛禽類) が実施されている。2017 年からの調査では周辺の河川敷で、オオタカ *Accipiter gentilis*, サシバ *Butastur indicus*, ノスリ *Buteo buteo* の営巣が確認されている。

筆者の一人である池田は、2016 年から稲戸井調整池利活用懇談会に地元の学識経験者として依頼を受け、毎年出席していた。2020 年 6 月 16 日に国土交通省利根川上流河川事務所守谷出張所で行われた「稲戸井調整池環境モニタリング会議」のなかで、当地における初のチュウヒの繁殖行動が報告された。モニタリングを行っていた調査会社によると、2020 年 6 月に、稲戸井調整池を掘削した後に生じたヨシ原において、チュウヒのオスからメスへの餌渡し、メスによる巣への餌の搬入が何度も視認され、写真撮影も行われたものの、ヒナの巣立ちは確認できなかったとのことだった。

2022 年 2 月 27 日 受理

キーワード: チュウヒ, 繁殖, 調整池

*: ohtakaikeda8823@ozzio.jp

現地調査

チュウヒの営巣地の状況を確認するため、2020年10月27日、国土交通省利根川上流河川事務所の調査員と筆者ら（池田と中森）が現地調査を行った。最初、ヨシ原の上をドローンを飛ばして上空から巣らしきものを探したが、発見できなかった。その後、胴付きゴム長を着用して、ヨシ原の中を歩いて調査したが、水深が30～40cmあり、止まり木と思われた倒木には、チュウヒの胸の羽毛が発見されたが、巣の発見には至らなかった。

当地におけるチュウヒの繁殖の明確な証拠を得るため、筆者は2021年4月から同年7月までの間、観察を行った。営巣地と思われる地点から約500m離れた利根川左岸の土手から30倍のズームとコンパクトデジタルカメラ（静止画、動画撮影可）を使用して観察を行った。時間帯は原則午前8時から12時とした。

チュウヒの繁殖の様子

4月20日は営巣地と推定される場所周辺を飛ぶチュウヒ成鳥の姿が何度も確認された。5月6日、7日、8日にはチュウヒ成鳥オスが上流のつくばエクスプレス鉄橋下の池付近や下流の元大利根有料橋下の自然池付近から餌をもって飛来し（図1A）、2020年の営巣推定地と同じ場所と考えられる営巣地から飛び出す成鳥メスへの餌渡しが見られた。6月7日、13日にはオスからメスへの餌渡しが活発になった。6月30日にはチュウヒが出入りするヨシ原近くで営巣していると思われるオオタカとの空中で争うように飛翔する様子が観察された。7月15日に河川事務所の許可を得て工事中のヨシ原の中にある道路に入って踏査したところ、巣立って道路に降りたヒナ（図1B）を確認することができた。その後、筆者らでヨシ原の上を飛び回る巣立ちヒナ3羽を確認した（図1C）。

巣そのものは確認できなかったが、営巣が確認された場所は前年にチュウヒが高頻度な出入りが確認された場所と同じところであった。

営巣地の環境と今後の課題

2016年12月の時点では、稲戸井調節池一帯は、掘削工事で造成中の裸地であったが、2018年1月には一部にヨシ群落が成立し、2019年4月には南側ほぼ一面がヨシ群落となり（割合は72%）、2020年12月には北側のやや背丈の低いヨシ群落と南側、2020年12月と2021年12月には北側の水たまりを除いてほぼ一面ヨシ群落（約80%）であった。営巣区画（4.4ha）と隣接する区画との間には土手状の境があり、ここは一部にはヨシも生育するが、大半は乾燥化してススキ *Miscanthus sinensis* やセイダカアワダチソウ *Solidago altissima*、オオバタクサ *Ambrosia trifida* 等の高茎草本が高さ2m程度で密生した状態になっている。一方高さ3～5m程度のヤマグワ *Morus australis* 等の落葉広葉樹も点在し、周辺高茎草地から樹幹部を突出しており、それらが、成鳥や巣立ち後の幼鳥の止まり木として利用されていた。このように営巣地周辺は掘削により浅い水深となり、湿性環境が再生され、抽水植物のヨシ原となっており、チュウヒの典型的な営巣環境（樋口ほか1999、納屋ほか2007、千葉ほか2008）になっていた。その北側にはヨシ原のない水面が2面（6.25haと4.8ha）続き、カモ類、サギ類、シギ・チドリ類及びコウノトリ（最大6羽）の採餌場所になっていた。

営巣地周辺にはイノシシ *Sus scrofa* やアライグマ *Procyon lotor* 等の哺乳類が多数生息しており、地上営巣のチュウヒにとって、イノシシによる踏害やアライグマによる卵の捕食は大きなリスクになると考えられる（国内ではまだ報告されていない）。タヌキによる捕食例は2015



図 1. 観察されたチュウヒの繁殖行動. A: エサ運び (2021 年 6 月 13 日), B: 巣立ちヒナ (2021 年 7 月 15 日), C: 巣立ちヒナ 3 羽 (2021 年 7 月 16 日, 撮影: 池田昇).

Fig. 1. Breeding behaviours of *Circus spilonotus* at regenerated wetland in Inatori-reservoir, Ibaraki Prefecture, Japan. A: carrying food by an adult bird, B: an fledgling, C: three fledglings.

年 6 月 26 日秋田県八郎潟で 1 例報告されている (高橋・東 2017). 周辺の高茎草本群落は乾燥化しているのに対し, 営巣区域内には常に水域が存在する状況 (1 年を通じて水位がほぼ一定) であり, ヨシ群落自体も 20 ~ 40 cm 程度冠水している部分が多かった. 高橋・東 (2017) では水深 14 cm 以上の湿地の巣では肉食類は出現しなかった, とあることから, この水域が哺乳類による巣への接触を阻む効果があると考えられる.

稲戸井調節池一帯では今後の工事期間は確定されていないが, 当該地では巣立ったヒナが飛ぶすぐ近くを 1 日に 150 台ものダンプカーが走っていた. また, 付近は小型ヘリコプター

の練習場になっているようで, 1 日に何度もヘリコプターの離着陸が繰り返されている日もあり, チュウヒはこうした状況をまったく気にしない様子であった. また, 営巣地から遠くない利根川本流の河川敷には, 広大な自然のヨシ原 (水面は本流のみ) が広がっている. チュウヒの営巣環境から考えると, なぜ自然のヨシ原よりも再生された湿性環境が選ばれたのか, 理由はまだはっきりしない. ただし, 前述のように営巣地の隣や周辺に位置するヨシ原のない水面が水鳥の繁殖地となっているようで, それらがチュウヒの繁殖期の主要な食物資源になっている (平野 2015) ことは一因と考えられる.

本論文作成に当たっては、原稿に対して有益なご指摘と各種の情報をいただいた。国土交通省関東地方整備局 利根川上流河川事務所専門調査官與儀亜希子氏と国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所守谷出張所長作田大氏に厚く御礼を申し上げる。

引用文献

- 茨城県. 2005. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書. 水戸.
- 茨城県. 2006. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書. 水戸.
- 茨城県. 2016. 茨城における絶滅の恐れのある野生生物 動物編. 水戸.
- 池田昇・田沼寿. 2007. 茨城県におけるチュウヒの繁殖初記録. *Strix* 25: 95-97.
- 環境省自然環境局野生生物課. 2016. チュウヒ保護の進め方. 環境省自然環境局野生生物課, 東京.
- 国土交通省利根川上流河川事務所. 2021. 稲戸井調整池 環境モニタリング調査結果. <<https://www.ktr.mlit.go.jp/tonejo/tonejo00820.html>>
- 真木広造. 2012. ワシタカ・ハヤブサ識別図鑑. 平凡社, 東京.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 図鑑 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
- 平野敏明. 2015. 新たな池の造成が秋冬期のチュウヒの狩り行動に及ぼす影響. *Bird Research* 11: A21-A30.
- 高橋祐亮・東淳樹. 2017. 希少猛禽類チュウヒの繁殖成績向上を意図した優良営巣環境の考究. 自然保護助成金成果報告書. 25:111-120.

A breeding record of Eastern Marsh Harriers *Circus spilonotus* at a semi-artificial regenerated wetland, Inatoui-regulating pond, Ibaraki Pref., central Japan

Noboru Ikeda^{1,*} & Hiroaki Nakamori²

1. Honcho 4533-4, Moriya, Ibaraki, 302-0109, Japan

2. Hon-machi 3-12-1, Shibuya, Tokyo, 151-0071, Japan. Oriental Consultants Co., LTD.

Inatoui reservoir is a facility for flood control. The excavation of the left side area of the Tone River resulted in a semi-artificial wetland, consisting mainly of about 4.4 ha reed bed with 6.25-ha and 4.8-ha open water areas around it. Three fledglings of Eastern Marsh Harriers were observed and photographed there in the breeding season in 2021.

Keywords: Eastern Marsh Harrier, breeding record, semi-artificial restored wetland, Ibaraki,

*: ohtakaikeda8823@ozzio.jp